

ワクワク はこね温泉 第 5 回 「堂ヶ島温泉」

菊川城司（神奈川県温泉地学研究所）

はじめに

箱根火山のめぐみによって生まれた箱根温泉について、シリーズで紹介する 5 回目です。今回は、箱根二十湯のうち、堂ヶ島温泉のおはなしです。

堂ヶ島温泉は、箱根町宮ノ下を走る国道 1 号線から早川の谷底へ標高にして 100m 程下った川沿いに広がる静かな温泉場です（図 1、写真 1、4）。

堂ヶ島温泉の歴史

堂ヶ島温泉は、鎌倉時代末期から室町時代初期にかけて僧侶として政治、文化にも功績を残した夢窓国師が開いたと伝えられています。国師は、堂ヶ島の風景や閑静な雰囲気を愛したと言われており、今でも草庵跡が残されています。

堂ヶ島という呼び名の由来はよくわかりませんが、「箱根七湯の枝折」に「堂ヶ島は究って凹なる所にて早川三方を遮り其さま少しく島のかたちをなせり」とあるように、温泉場が島のように見えるためだと考えられています。その「箱根七湯の枝折」によれば、江戸時代後期の堂ヶ島温泉には 5 軒の湯宿（奈良屋、大和屋、近江屋、丸屋、江戸屋）があり、温泉は「大滝小滝穴の湯杯とてさまざまの名湯あり大滝は少しあつく小滝はさほどもなし就中穴の湯というは・・・岩穴にて其間より温泉湧出るなり」と記載されています。また、温泉の効験（効能）は

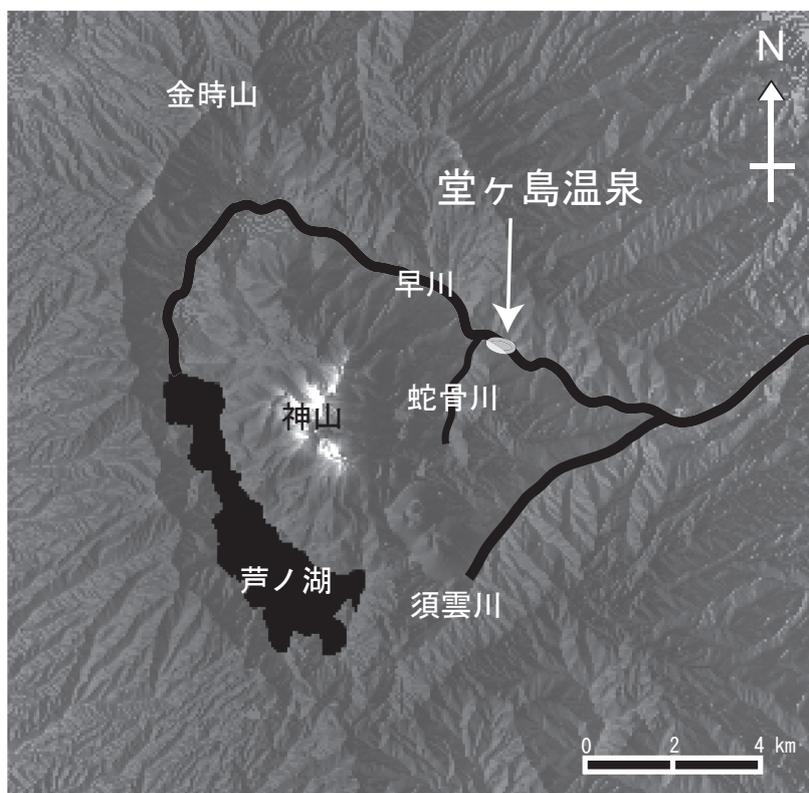


図 1 堂ヶ島温泉の位置。箱根カルデラの北東側、早川の渓谷に拓けています。

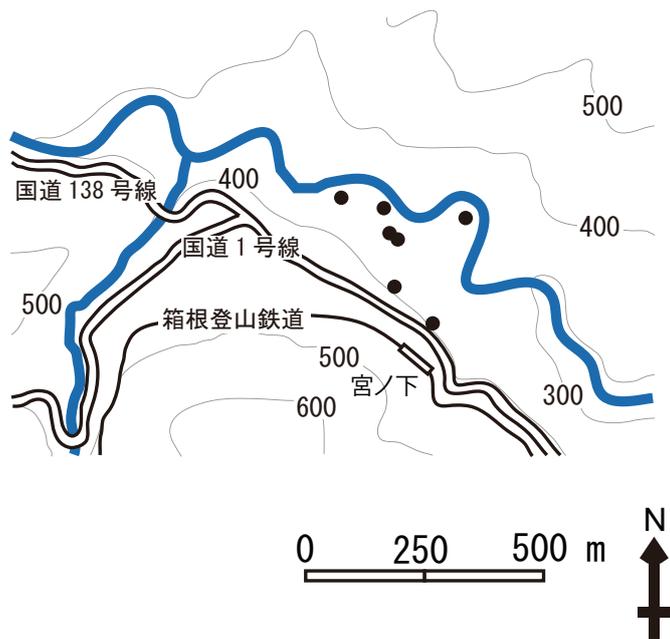


図 2 堂ヶ島温泉の源泉分布。2008(平成 20)年現在。



写真1 早川対岸から見た堂ヶ島温泉



写真2 堂ヶ島温泉旅館のケーブルカー。現在では、モノレールに変わっています。



写真3 堂ヶ島温泉旅館のロープウェー



写真4 ロープウェーから堂ヶ島温泉を見下ろす

「積聚^{しやくじゆ}、痰痛、脚気、中風、血塊、痔、頭痛、^{せんき}疝気、喘息、めまひ、僕傷、すぢけ、痛風、しびれ」と記されていました。

堂ヶ島温泉の現状

堂ヶ島温泉の最大の特徴は、早川溪谷の深い谷底に温泉場があることです。有名な唱歌である「箱根八里（鳥居忱作詞、滝廉太郎作曲）」は、「箱根の山は 天下の嶮 函谷關もものならず 萬丈の山 ^{せんじん}千仞の谷 前に聳え 後方にささふ・・・」と歌われますが、この歌の「千仞の谷」とは、まさにここを指しているのではないかと思われるような谷底に堂ヶ島温泉は拓けています。現在は2軒の旅館が営業していますが、急峻な谷で車が入れないため、宿泊客はそれぞれの旅館が所有するロープウェーとモノレールを利用して、国道1号線から早川の谷底へと下りて行きます（写真2、3）。堂ヶ島温泉に下り立つと、国道などの世俗

的な喧騒は届かなくなり、まるで深山幽谷へ足を踏み入れたかのようにです。

2010（平成22）年3月末現在、箱根温泉の源泉は全部で351ヶ所ですが、堂ヶ島温泉にはその約2%にあたる7源泉があります（図2）。そのうちの3本は古来から存在する湧泉で、現在でも利用されています。

2008（平成20）年に堂ヶ島温泉の4源泉で行われた調査結果をみると、温度は42.3～82.4℃の範囲、揚湯量（湧泉は湧出量）は1分間に43～118リットルの範囲でした（表1）。

堂ヶ島温泉の泉質

堂ヶ島温泉でみられる泉質は、2008（平成20）年の調査によれば、ナトリウム-塩化物・硫酸塩泉、ナトリウム-塩化物泉、単純温泉の3種類です。温泉に溶けている主な成分はナトリウムイオン、塩化物イオ

表1 堂ヶ島温泉の平均値。2008（平成20）年の調査による4源泉の平均値です。

項目	平均値
温度（℃）	65.1
揚湯量（L/min）	80.
pH	8.2
電気伝導度（ $\mu S/cm$ ）	1888.
ナトリウムイオン（mg/L）	349.
カルシウムイオン（mg/L）	33.6
塩化物イオン（mg/L）	439.
硫酸イオン（mg/L）	151.
炭酸水素イオン（mg/L）	70.5
珪酸（mg/L）	127.
硼酸（mg/L）	21.5
成分総計（mg/L）	1205.

ンが多く、次いで硫酸イオンが多くなっています。

堂ヶ島温泉の源泉のうち、動力装置によって揚湯されているものは、箱根湯本温泉、塔之沢温泉や大平台温泉と同様に、早川凝灰角礫岩など箱根火山の基盤岩から汲み上げられている温泉です。自然湧泉は、基盤岩の温泉ではなく、箱根火山の溶岩の亀裂中から湧出している温泉で、宮ノ下温泉や底倉温泉などに近い泉質です。

今回は、堂ヶ島温泉について簡単に紹介しました。次回は、宮ノ下温泉について紹介します。お楽しみに。